

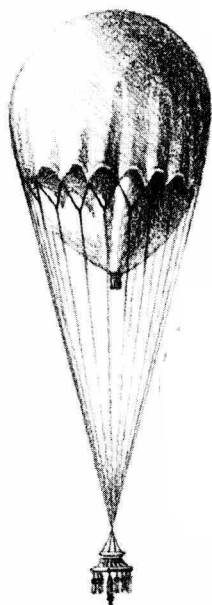
鈴木俊平

風船爆弾



風船爆弾

鈴木俊平



新潮社

風船爆弾

一九八〇年一月二〇日 発行
一九八〇年三月五日 三刷

定価／九〇〇円

著者／鈴木俊平

発行者／佐藤亮一

印刷所／二光印刷株式会社

製本所／大口製本株式会社

発行所／株式会社新潮社

東京都新宿区矢来町七一

電話 業務部(03)二六六―五一
編集部(03)二六六―五四―

郵便番号 一六二

振替 東京四―八〇八

但し、落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。



© Shunpei Suzuki, 1980 Printed in Japan

風
船
爆
彈

アメリカ合衆国の太平洋岸、オレゴン州南部のクラマス湖に近い森林公園に、一つの記念碑が建てられている。

ブロンズ板には六名のアメリカ人の名前が彫られ、そこに意外な碑文が鮮明に記されてある。『この地は第二次大戦のさ中、アメリカ大陸で敵の攻撃のため死者を生じた唯一の場所である』ここに表現された敵は、日本を指し示している。日本本土から太平洋を横断して行った「ふ」号兵器、風船爆弾と称される兵器が遠く広い大陸を襲った。片田舎の地で一人の婦人と五人の子供たちの生命を奪っていた。

出来事は、昭和二十年、一九四五年の五月五日に発生したものであった。その日、ブライという町に住む牧師ミッチェルは、夫人と近所の五人の子供たちを車に乗せ、森林公園へピクニックに出掛けた。

到着地でかれらを降ろした牧師は、駐車場を探しだして、漸く弁当などを運び出そうとしていた。

「風船みたいなものが木にぶら下っているよ」

子供たちの声を森のほうに聞きつけた時、牧師は反射的に、「触るな！」と叫んだつもりだったが、その刹那、凄まじい轟音が反響していた。

牧師は無我夢中で森に駆け込んだ。そこでかれが目撃したものは、爆発で土にあいた穴の周辺

に散乱している、硝煙と焼焦げの臭気を漂わせた六個の惨死体だったのである。木にぶら下っていた巨大な風船の下部には爆弾と焼夷弾が不発のまま懸吊けんどうされていた。好奇心の強い子供のだれかがそれに触って一瞬のうちに事故をまねいたのだ。

いずれにしても日本本土からの攻撃兵器によって、アメリカ大陸に死者が生じたのは確かな事実であった。この稀有の惨事を記念して碑文は永久に保存されてゆく。

死者はミッチェル夫人のほか、十二歳、十三歳の子供たちで、シャーマン・シューメイカー、ジェイ・キフォード、エディ・エンガー、ジョン・パッチ、ディック・パッチである。

確かに日本軍の大本営直属の秘密部隊は、国内の三カ所からアメリカ本土に向けて決戦兵器を放流させた。攻撃は昭和十九年十一月から二十年四月初旬まで続けられた。アメリカ国民も無差別爆撃の危機にさらされていた。

風船爆弾の届いた範囲は、アラスカ、カナダ、アメリカ合衆国からメキシコに及んでいる。

農作業に従事している農夫たちは、浮遊して行く奇怪な風船を目撃した。原因不明の爆発事故、山火事発生、不発気球捕獲などがひき続いた。そのなかで件数の多いのは、合衆国西海岸オレゴン州の四十件を筆頭に、モンタナ州で三十二件、ワシントン州で二十五件、カリフォルニア州で二十二件、ワイオミング州、サウスダコタ州、アイダホ州が八件ずつ、あとは六件以下になるけれども、全ての州に最低一件の出来事が生じていたのである。

カナダでは、西海岸ブリティッシュ・コロンビア州の三十八件を筆頭に、アルバータ州の十七件、サスカチュワン州八件、マニトバ州六件ほか北方ユーコン地区、マッケンジー地区にも五件、四件と風船爆弾は到達していた。アリゾナ列島をふくむアラスカでは三十二件を数えた。「日本からの気球兵器到達に関して絶対に情報を漏洩させるべからず」

嚴重な報道管制が布かれた。

それはアメリカ合衆国政府の最高命令となつていった。国内に報道することも、国民の人心攪乱を狙っていると予測される日本の術中に嵌る。さらにそれが外国の情報機関から日本政府や軍部に伝われば、ますます気球作戦に拍車をかける引金になってしまう。

箝口令によつて取締りの眼は、各州の隅々まで鋭く光った。戦勝を目前にしているアメリカの戦争指導機関は緻密な防衛作戦を練った。日本からの長距離爆撃に備えなければならなかった。

二

日本の晩秋から冬季にかぎって、上空八、〇〇〇メートルから一万二、〇〇〇メートルの高度に、強烈な西風が吹いた。

西風は、太平洋を横断して時速二〇〇キロメートルを超え、最も速い日は時速三〇〇キロメートルの猛スピードで吹き続けた。

確実に風はアメリカへ向つて行く。

日本軍最上層部にとって、

「これぞ神風」

であつた。

戦況が悪化するばかりの昭和十九年十月、陸海軍はフィリピン沖の敵機動部隊に決戦を挑み、六万九、〇〇〇トンの超弩級戦艦「武蔵」は被弾して夕闇のシブヤン海に沈んだ。その翌二十五日に、第一航空艦隊司令長官大西瀧次郎中将の決意によつて、神風特別攻撃隊をアメリカ艦隊へ

初めて体当りさせ、終末的実戦指導がおこなわれ始めたのだ。

しかも最初の体当り攻撃と奇しくも同じ日、大本営は一つの直屬秘密部隊に重大な命令を伝達していたのである。

俗に風船爆弾と呼ばれるが、「ふ」号兵器によるアメリカ本土攻撃作戦にはかならなかった。

一、気球聯隊ハ「米国」本土ニ対シ、気球ヲモツテスル攻撃ヲ開始スベシ。実施期間ハ、十一月初頭ヨリ明春三月頃マデト予定スルモ、状況ニヨリ之ガ終了時期ヲ更ニ延長スルコトアリ。攻撃開始ハ概ネ十一月一日トス。但シ十一月以前ニ於テモ氣象觀測ノ目的ヲ以テ試射ヲ実施スルコトヲ得。試射ニ当リテハ実弾ヲ装着スルコトヲ得。

二、投下物料ハ爆弾及ビ焼夷弾トシ、ソノ概數次ノ如シ。

十五疋爆弾 約七、五〇〇個

五疋焼夷弾 約三〇、〇〇〇個

十二疋焼夷弾 約七、五〇〇個

三、放球數ハ約一五、〇〇〇個トシ、月別放球標準概ネ左ノ如シ。

十一月 約五〇〇個トシ、五日頃マデノ放球數ヲ努メテ大ナラシム。

十二月 約三、五〇〇個

一月 約四、五〇〇個

二月 約四、五〇〇個

三月 約二、〇〇〇個

放球數ハ更ニ約一、〇〇〇個増加スルコトアリ。

四、放球実施ニ当リテハ、氣象判断ヲ適正ナラシメ以テ帝國領土並ニ「ソ領」ヘノ落下ヲ防止スルト共ニ、米國本土到着率ヲ大ナラシムルニ努ム。

五、機密保持ニ関シテハ、特ニ左記事項ニ留意スベシ。

○機密保持ノ主眼ハ特殊攻撃ニ関スル企圖ヲ軍ノ内外ニ対シ秘匿スルニ在リ。

○陣地ノ諸施設ハ上空、並ニ海上ニ対シ極力遮蔽ス。

○放球ハ氣象状況之ヲ許ス限り、黎明、薄暮及ビ夜間等ニ実施スルニ努ム。

六、今次特殊攻撃ヲ「富号試験」ト称呼ス。

「富号試験」の呼称は、軍の内外に対するカモフラージュであつた。「試験」ではなく必死の「奇襲」にはかならない。実際には、「ふ」号作戦という名が用いられた。

風船爆弾は、命令通り、黎明や薄暮、また夜間に、音もなく舞い上り、上層気流に乗って幾百幾千とアメリカ本土をめがけ飛翔することになった。

放球数の何割が敵国へ殺到して、どの程度が有効な場所へ被害を加えるか。氣象と風に頼った無人兵器は、最後の大きな賭けであつた。

しかし、この最後の賭けである作戦は、実施までに長く複雑な背景があつた。

軍部が真剣にアメリカ本土攻撃に関する研究を具体化したのは、昭和十七年四月十八日のB25爆撃機による初空襲がきっかけである。開戦劈頭の、ハワイに対する奇襲作戦は成功していた。敵の戦力、海上兵力に大きな打撃を与えた。

だが開戦僅か五カ月後に、反攻に転じていた敵の空母から出撃した爆撃機によって、日本は直

接本土に攻撃を受けた。全く裏をかかれた予想外の奇襲であった。

航空母艦二隻乃至三隻からなる敵機動部隊の接近を知って、東京空襲の布石と認めた大本営海軍部は、空襲の際に敵機が海岸から三〇〇哩附近に来て離艦すると予想した。

それ以上遠い哩数の位置からでは、敵機が母艦に戻れないからであった。空襲は夜間に違いない。したがって三〇〇哩附近まで接近しつつある機動部隊を早く発見し、昼間のうちに魚雷攻撃をかけ、更に印度洋作戦から帰投途上にあった南雲忠一中将の機動部隊が急速進撃して追討ちをかける邀撃態勢が整えられた。

アメリカのドウリットル陸軍中佐指揮の日本爆撃隊は、約一カ月の猛訓練を受けた。隊員は、志願者で編成された。ノースアメリカンB25十六機は、空母ホーネット号に搭載され、アラメダから出撃して僚艦のエンタブライズ号と合流ののち、日本へ接近していた。

日本の東方四〇〇哩から発艦して夜襲をかけ、その翌朝に蒋介石軍の中国大陸基地へすり抜けて行く。これがドウリットル爆撃隊の当初からの計画であった。

だが十八日早朝、監視艇日東丸に発見されたため、急に機動部隊は接近を止め、昼間の空襲を強行することに作戦を変更した。

B25は、犬吠岬東方六五〇哩の意外にも遠い海域から発進し、爆撃機を発進させた空母など機動部隊は直ちに船脚を速め、日本軍の襲撃圏外へ離脱し去ったのだ。

ドウリットル爆撃隊の初空襲による川崎、横須賀、名古屋、神戸などの被害は、死傷三百六十三名、家屋損害三百五十戸。これらの実数にあらわれない国民の恐怖心、そこから発生する戦意喪失感を大本営陸海軍部の参謀たちはおそれていた。そして報復作戦を考えている参謀たちは多かった。陸軍部では支那派遣軍総司令官に対して浙贛作戦を發動した。

これは太平洋方面の空母から出撃したアメリカの爆撃機が、華中方面の飛行場へ着陸できないようにする消極的防衛策ともいえるものであった。

「主として浙江省方面の敵を撃破して其の主要航空根拠地を覆滅し該方面を利用する敵の帝国本土空襲企図を封殺すべし」

この命令と同時に杉山元參謀総長は、具体的に敵航空根拠地として麗水、衢州、玉山附近の飛行場群を地上部隊で攻略し、その他の飛行場群は航空部隊で制圧破砕せよ、と指示したのである。また海軍側は、論議のすえ、東京初空襲から二十日後の五月五日、山本五十六聯合艦隊司令長官にミッドウェイおよびアリリューシャン西部要地の攻略を命じた。いずれも、東京初空襲への報復作戦である。そしてアメリカ本土攻撃の風船兵器も、報復手段の一つとしてひそかに開発を進められたのである。開発の本拠は、「登戸」であった。

「登戸」というのは、東京郊外の登戸町の多摩川を見下ろす高台に位置する第九陸軍技術研究所のことである。「登戸」とか「九研」と俗称され、秘密兵器の研究開発、および製造実験を専門にする特殊機関であり、約十萬坪の敷地は恐ろしい別格地域のように外界から完璧に遮断されていた。

所員は、機密保持の点で嚴重な身辺調査を受け、常時スパイ行為が絶無であるよう監視された。起伏に富んだ地形を利用して、大小さまざまな形の建物が数多く内包され、有能な人材が専門別に配置されて、諜報器材、防諜器材、謀略器材、宣伝器材など緻密な計算にもとづく秘密戦用の武器や道具その他を研究開発しつづけていたのである。

だが一般人には、全く何をしているのか知るものはなかった。報復行為として、まず潜水艦でアメリカ本土に接近し、浮上して気球爆弾を放流させる研究がここでおこなわれた。謀略器材の

一つとされた。

「九研」の謀略器材は、爆破、殺傷、放火、細菌、毒物、偽騙、潜行、連絡、潜在に関連する直接攻撃的なものが主役であった。

各種の研究兵器には、開発された順番にしたがって、「い」号兵器、「ろ」号兵器と呼ばれる慣行があり、攻撃用気球は、いろは第三十二番目の「ふ」号兵器と称された。

のちの風船爆弾も、「ふ」号兵器であるが、偶然にも風船の「ふ」と、いろは順の「ふ」が一致したものであった。

これに似た例は、初めて早くから開発されたロケット砲が「ろ」号兵器、無線操縦兵器が「む」号兵器と、偶然に開発のいろは順と兵器名の頭文字が一致するものにみられる。

「ふ」号兵器は、すでに第九陸軍技術研究所の草場季喜技術大佐が陸軍伝統の紙製気球に改良を加えた爆撃用兵器として考案していたのだ。

草場は、部下の武田照彦大尉に緊張した表情で伝えた。

「わしらが考えていた気球爆弾で、アメリカ沿岸一、〇〇〇キロメートルに浮上した潜水艦から、米本土へ報復攻撃をする。たまたま参謀本部とも合意を得たし、海軍軍令部もこちらの実験が成功したら、潜水艦の機装をしてくれそうな気配だ」

「はい」

張りきった返事で、武田大尉は「ふ」号兵器に取り組む決意を表明し、西田知男中尉、折井弘東中尉、中村一夫中尉と共に研究室に閉じこもった。

直径六メートルの蒟蒻糊で幾層にも貼り合わされた和紙製の気球が設計され、製造された。昭和十八年の正月も過ぎ、二月の寒い日が到来していた。武田たちは新しい気球を山陰の鳥取県米

子市まで隠密裡に自動車で運び、気球を飛ばして太平洋の洋上まで一、〇〇〇キロメートルの実験に成功したのである。

「よし、すぐ呉の軍港へ赴き、潜水艦の機装を協議してくれ」

と草場は命令した。陸軍側から海軍の潜水艦に乗り組み、「ふ」号兵器でアメリカ本土を攻撃する人間は、技術者でなければならない。実験成功まで漕ぎつけた武田大尉ら四名のほか適任者はない。

敵に発見されないよう北米大陸の一、〇〇〇キロメートル沿岸に浮上する事が可能かどうかは判らなかつた。浮上して気球爆弾を放流した後なら、爆沈されてもよい、と武田大尉らは死を疾うに覚悟していた。自分たちの手造りといえる新兵器で実戦攻撃にも参加できるのだ。無事に放球を完了できればあとのことは念頭になかつた。

浮上放球作業中、哨戒機や哨戒艇の視野に入っても日本の潜水艦と認定されないように、特殊機装も打合せ、武田大尉は呉から登戸の研究所に戻って待機していた。

「風船決死隊だな」

と武田大尉は、西田中尉らに高台の冬の陽だまりのなかで体操をしながら笑顔をみせて言った。みな明朗な表情で体力を整えた。数個の攻撃気球の精密検査、時限式爆弾焼夷弾投下装置の点検、放球操作の迅速化訓練など、出撃前にやらなければならないことはいくらでもあった。

出撃直前になつても、家族たちにも決死行をさとられないようにする覚悟であつた。

三月になつた。武田大尉らは、潜水艦の準備完了のしらせが今日か明日か、切迫して来たのを感じていた。

草場大佐が、自室に武田大尉を呼んだ。

「海軍から報告が入った」

「参りましたか」

それは意外な連絡であつた。海軍は、北米海岸へ潜水艦を出撃させられない、と断わつてきたのである。武田大尉は全身から力が抜け、張り詰めていた気合が急激にしほんでゆくのを覺えた。

「何故でありますか」

「ミッドウェイ後、半年でガダルカナル撤退、それ以後、南方作戦が急になったから、陸軍の要請した気球爆弾による米本土沿岸一、〇〇〇キロメートルへ、潜水艦を出している余裕はないという」

沈痛な表情で、草場は西田中尉たちも呼んで同じことを伝えた。

「しかし納得がゆきません。艦の不足、南方作戦のあわただしさは、今になってからでなく、先月の機装協議の段階でもそうだったのでありますが、かれらは協力的でありました。なぜ急に断わってきたのか、不思議であります。無念であります」

武田大尉らは、唇を噛みしめ、臉をきつく閉じて口惜しそうに佇んでいた。

直径六メートル気球の設計製作、一、〇〇〇キロメートルの飛翔実験、呉軍港における協議、攻撃実施の準備までの情熱、それらは大本営海軍部の了解のもとに燃やされつづけて来た。

武田大尉らは、突然海軍に裏切られたとしか考えなかつた。協力者顔をしていながら、肚のなかには複雑怪奇な相手にあしらわれ、手玉にとられていたような不快の念から憎惡にまで高まりそうであつた。相手の海軍を信じている度合が深かつたからである。

日が経つた。第九陸軍技術研究所の武田大尉らの耳に、海軍が独自で長距離攻撃気球を研究し、

距離一、〇〇〇メートルの実験に挑んでいるという情報が入ってきた。

「そうか、海軍は自分たちだけで敵本土へ気球攻撃をしたいのか」

武田は、敵はアメリカでなく自国の海軍であるような錯覚で一瞬眩暈を覚えた。

三

「こうなれば、もはやわが母国からアメリカ本土の上空まで、完璧に直達できる風船爆弾を作って攻撃するほか手段がない。海軍に艦船協力を断わられたとあつては独自でぶつかるほかない。陸軍研究所の面子にかけても総力を挙げて完成に漕ぎつけるのだ」

登戸の第九陸軍技術研究所長、篠田鏖中将は、秘密兵器研究生産の総元締であるが、「ふ」号兵器による北米沿岸からの攻撃について海軍が拒否した件を草場大佐から報告され、顔面を蒼白にさせて吐きすてるように言った。

精神的ではあるが、冷静沈着な篠田所長が興奮するのは稀有な事態であつた。

海軍にも、それまでに気球を扱った歴史はある。だが気球を用いた装備、兵器は、明治時代から陸軍が採用して、日露戦争のさ中から敵状偵察或いは大砲の着弾状況観察など実戦に使つて来たものである。

明治三十七年六月に、陸軍は初めて気球隊を臨時に一個だけ編成して、旅順口の攻囲戦に参加させた。飛行機もない時代に、繫留気球とはいえ、吊り下げられたゴンドラに乗って空高く人間が浮上する事が日本では画期的な業績でもあつた。

「今になって海軍は風船兵器でも陸軍に負けるものか、と競争心を昂ぶらせたのでしょうか。真

相の詳細は不明ですが、距離一〇〇キロメートル飛翔の記録を武田大尉たちが十倍の一、〇〇〇キロメートルまで短時日の創意工夫で完成いたしましたものを、海軍は横奪^どりしたと言う者もおります。閣下のおっしゃるごとく、自分もこうなりましたからは、航続距離一、〇〇〇キロメートルを更に十倍の一万キロメートル以上にして、アメリカへ着くよう鋭意専心する覚悟であります」

と草場は、直立不動で篠田中将に伝えた。

風船兵器開発の責任者である草場は、豊頬白哲の童顔で、部下にも温厚な人柄が慕われていたが、篠田の内命で緊迫感を全身から漂わせた。

草場は、陸軍内で風変りな経歴を持っていた。大正七年に中央幼年学校を卒業した。抜群の成績であった。そのままなら陸軍大学校への選ばれた進路を歩む逸材と囑目されていたのに、かれは自ら砲工学校へ道をねじ曲げたのである。変り種と評する学友もあった。

だが、かれ自身は、理工学方面の勉強が最も好きなのであった。大日本帝国陸軍という巨大な組織のなかで、かれは科学的戦力の価値に早くから目ざめていた。工科を機械化したいと望んだのである。

かれは砲工学校から、東京帝国大学工学部に進み、昭和二年に卒業すると、陸軍のドイツ駐在武官になった。

やがてかれは、昭和十五年夏、東満州国境に近い興源鎮の山中で、独立工兵第二聯隊長に就き、超重「い」号兵器、「いて」号兵器を主とする特殊作戦の猛訓練を指揮した。二つの兵器とも、有線電動式の擬装された装甲車だ。音響が低いため、鉄条網破壊やトーチカの爆破粉碎には最適の実験部隊であった。三箇中隊の将兵も材料廠も、自由自在に活動できるようになると、草場は